



2006 年 (平成 18 年)
5 月号 (No. 732)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価 1 部 150 円
URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目 次

マナスルへの道④

- 第三次登山隊二次登頂の日・・・ 1
- 「雪山讃歌」と北山の小舎・・・ 4
- 新ルーム104号室の改装と今後・・・ 5
- 中央分水嶺踏査・・・ 6
- 福島/信濃/休山会/中央分水嶺踏査委員会事務局より
- 支部だより・・・ 8
- 秋田/石川
- 活動報告・・・ 10
- 総務委員会/医療委員会/新土曜会
- 追悼・・・ 12
- 今井喜美子さん/小谷隆一さん
- 東西南北・・・ 13
- ハインリッヒ・ハーラーの死
- 図書紹介・・・ 14
- 会務報告・・・ 16
- ルーム日誌・・・ 17
- 会員異動・・・ 17
- 図書受入報告・・・ 17
- Climbing & Medicine・55・・・ 18
- インフォメーション・・・ 19

▶ 日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木・・・ 10~20時
水・金・・・ 13~20時
第2、第4土曜日・・・ 閉室
第1、第3、第5土曜日・・・ 10~18時

マナスルへの道④ 第二次登山隊二次登頂の日

日下田 實

連載の最終回は、1956年の第三次登山隊で、5月11日に登頂した二次登頂者の日下田實氏に執筆していただきました。9日の初登頂に続き、二次登頂を果たした11日を中心にして登頂の様様などを書いてもらいました。

私たち(加藤、日下田)第二次アタック隊の頂上への行動は、5月9日から始まった。この日は、今西壽雄、ガルツェンの第一次登頂隊がC6から頂上に向かった日であるし、処女峰マナスルが登られた日でもあった。

私たちは、サポートのシエルパ、オンデイ、サルキと荷揚げのシエ

ルパ4名とともにC4を出発し、午後1時ごろ、C5に到着した。ここで私たちは、第一次隊の今西、ガルツェンを迎え、頂上のルートについて今西から聞いた。今西は「C6から頂上まではまったく心配はいらない。時間がかかったのは、この好天で頂上に1時間以上いたからだ。ただ頂上手前の岩稜

の雪庇には気をつけてくれ。第二次隊はなんの心配もいらんよ」と言って、夕闇せまるなかをC4へ下りていった。

その晩、C5では酸素を吸ってゆつくり休むことができた。

翌10日、オンデイに声をかけられ、キッチンテントに向向いた。風は少しあるが、すばらしい天気だ。オンデイとストーブを囲み、朝食を作る。アルファ米に八丁味噌を入れたら、おいしそうな味噌雑炊ができた。この天気とこの朝食からみて、私たちの行く手に障害のあるはずがなかった。しかし、とんでもないところに伏兵がいて、C5を出発するときにはまったくみじめなものになってしまった。

計画では、私たちのサポートに

大塚とシエルパ3名が当たることになっていたが、C4を出発するときシエルパは2名になってしまっていた。さらにこの2人のうち、サルキが完全にダウンしてしまい、シエルパはオンデイだけになってしまった。C2からは「無理するな。強行してはならん」と言ってくる。酸素担当の辰沼ドクターをまじえて協議した結果、彼が「俺が行く」と宣言し、サポートしてもらうことになった。

私たちは、大塚、辰沼、オンデイでC5を出発した。しかし、辰沼はC5に入ってからほとんど寝ていない。スノーエプロンの斜面に入ると、行動困難となり、C5に引き返すことになった。彼の荷物を大塚、オンデイで背負い、C6へ向かう。スノーエプロンの斜

面は下から見るより急で、雪の状態もあまりよくない。各自、毎分2・5リットの酸素を吸い、ほとんど休まずに登り続けた。

ほぼ中央部の岩場からプラトローまでは、第一次隊のきつたステップがあり、雪質もよくなり、快調にペースを上げた。午後1時、私たちはこの斜面を登りきり、プラトローに出た。雪と氷と岩くずに覆われた広大な斜面は、スノーエプロンの急斜面とまったく違う。荒涼としていて、天上に棲む悪魔の踊り場とも言えよう。

しかし、プラトローからの眺めは素晴らしかった。西方には、マルシャンディの谷をへだてて、アンナプルナの大連峰が連なり、そのはずれにマチャブチャレが小粋な姿を見せている。北に目を転ずると、53年のときのプラトローへの取付点となった岩が見え、そのはるか下には長大な氷河が流れ、エメラルドグリーンに輝く氷河湖が見受けられた。

ここから約1時間ゆつくりと登高を続け、午後2時半にC6に到着した。氷と岩にはさまれた雪の台地に、赤い小さなテントが張られていた。中にはエアマットがき



5月9日、登頂後、無事C5に帰り着いた一次アタック隊を迎える

れいに敷かれ、食料、燃料が整然と置かれていた。私たちがサポートしてくれた大塚、オンディはすぐに帰途についた。自分たちの酸素を私たちのために残し、スノーエプロンの急斜面を下りていった。

サポートの二人が帰り、加藤と私だけの世界になってしまった。加藤は酸素と登頂用装備の点検整備に当たり、私は炊事いっさいをやることにした。さっそくテントの前の日溜りにクッカーを出し、夕食の用意にとりかかった。ほとんど無風、日ざしもやわらかく寒くもない。のんびりした気分が重畳とかさなる山々をぼんやり眺め

ていた。まったく標高7800mのプラトローにあるまじきほどの憂い日であった。午後5時ごろ、私たちはそれまで想像もできなかったような食欲でささやかな晩餐を終えた。

狭いテントは2人が入るといっばい動くこともできない。1人ずつ入り、寝袋

にもぐり込む。さすがにここでは酸素なしで体を動かすと相当に息がきれる。バカバカしい話だが、2人がテントに落ち着くのに1時間以上かかってしまった。

この夜の星空はすばらしくきれいだ。夜中に加藤が酸素ポンベのシリンドラーを交換してくれ、私はぐっすり休むことができた。

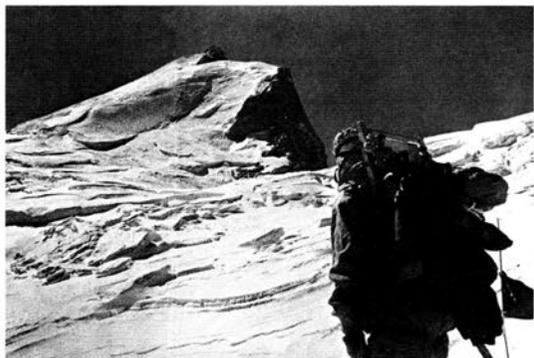
5月11日、5時に目をさます。この日も前日に劣らぬ素晴らしい天気である。しかし、とても寒い。マイナス22度、マナスルに入ってもっとも寒い朝であった。テントサイトは陽の当たるのを待つて7時50分、私たちはそれぞれ3本のシリンドラーを背負いC6をあとに

した。

C6を出てすぐ青氷の露出しているところがあつた。深い緑色をした氷、ピッケルでたたいてみる。まるで厚いガラスをたたいているようだ。ここを通りぬげ硬雪の急斜面を越すと上のプラトローに出た。このプラトローは大きく上下に分けられる。C6はこの上下のプラトローの間の段になっているところにあるプラトローを見ることができない。上のプラトローはほぼ正方形にちかく、全体に南西方向にゆるやかに傾斜しており、最後は相当な急斜面になっている。

9日に今西たちの通つたあとに赤旗が3カ所たててあつた。この殺風景なプラトローでは赤旗がよい目にしみる。天候も素晴らしい。時おり吹く風に赤旗がなびいている。

私たちは「シュー、シュー」という酸素の音を聞きながら頂上へ向かって快適なペースで進んだ。毎分3リットの酸素で1時間半歩きつづけ、私たちがあとで「ニセ頂」と呼んだところで休み、シリンドラーをつけ替えた。頂らしいピークに見えた肩に急ピッチで登ると、



5月11日、頂上直下の雪面を登る日下田

その先約30^{メートル}ばかりの相当な急斜面があらわれ、そこには巨大なステップがきつてあった。ここでトップを交代し、加藤が先行する。この雪壁を越えると様相が一変した。東側に雪庇の張り出した鋭い岩稜があらわれ、小さなピークがつづき緊張する。二つ三つ小さな岩塔も越すと、その先に3本の赤旗がたてられた岩峰があった。頂上だ。間違いはない。私たちは緊張して先を急いだ。しかし、この岩峰は頂上の手前に大きなギャップをつくっていた。狭い岩稜に立ち、ギャップをはさんでしばらく8125^{メートル}(現在は8157^{メートル})

の頂上を眺めた。頂上は私たちのいるところから約2^{キロ}ぐらい高い。コルからは約7^{キロ}ぐらいのフェイスになっている。頂上に雪はなく、東側に雪庇のたまごみたいいな雪がへばりついているだけだ。私たちがそこに酸素を置き、カメラだけ持ってコルに下りた。この場所も狭い。2人でいっばいになる。落石が多く不安定な場所だ。加藤がまず登り出した。私は確保しながら16^{メートル}の撮影機で加藤の最後の登攀を撮影していった。午前11時、加藤が頂上に立った。登頂の様を撮影し、私たちは上と下でそれぞれひと休みした。私は狭いコルに腰を下ろし、はるか屏風のごとくたっているアンナプルナ連峰を眺めていた。これまでは実にうまく、何の障害もなくはこんできたのだが、このとき思いがけないことが突発した。「ガラガラ」と何か落ちる音がした。ひよいと見るとわきに置いておいたカメラが、それもついさつき加藤が頂上に立つまでを撮影した16^{メートル}のカメラが落ちてゆくではないか。思わず声を出し立ち上がった。加藤もびっくりして「どうしたっ」とロープを引く。カメ

ラは目の前で2度、3度大きくバウンドし、2つに別れて2000^{メートル}はあるうマルシャンディ側の氷河めがけて私の視界から消えていった。しばらく杲然とカメラの消え去ったあとを眺めていたが、加藤にうながされ頂上に立った。私たちは、隊長から頼まれていた頂上の石を手当たり次第ポケットに入れ、早々に二度と来ることはない頂上に別れを告げた。天候も悪化の徴候を示してきていた。全体にうすい雲がひろがり、太陽に大きな丸い虹がかかってきた。喜びにあふれ、足取りも軽く帰るべきところを、私は憂鬱であった。隊長に、依田に、皆にどうあやまつたらよいか……。私たちは、午後1時すぎ、C6に帰着した。雲は厚くはなつていたが風はない。セーターと羽毛ズボン脱ぎ、お茶を沸かして飲み、二度と使用することのないC6を、第一次隊のやったようにきちんと整頓してから発った。一夜ではあったが思い出の多いC6をあとにして、C5もすぎ、午後7時ころC4に帰り着いた。以上が、第二次アタック隊のあらましである。



5月11日、山頂の加藤隊員(写真はすべて「マナスル写真集」から)

さて第三次隊の成功の原因であるが、まず横隊長の統率力にあると思う。たしかに登頂時好天に恵まれたことも大きな要因ではあるが、この時期をのがさず登頂を決断した横隊長が、この好天を引きよせたものだと思う。次に周到な準備であろう。53年の第一次隊、54年の第二次隊、55年の調査隊、55年の先遣隊の記録をもとに入念な基本計画の立案、それにとまなう装備、食料の準備等、準備の段階から横隊長の意向が強く反影されていた。それが隊長、シエルパのチームワークの良さなどと相まって成功したものであり、成功の原因はと聞かれると横隊長の力量と言わざるを得ないのである。

「雪山讃歌」と北山の小屋

四手井靖彦

JRの情報誌「ジパング倶楽部」06年1月号に、「雪山讃歌」のことが載っていた。群馬県の鹿沢温泉でこの歌が生まれたいきさつを童謡研究者という人が書いている。作詞したのは三高山岳部OBの西堀栄三郎のほか、四手井綱彦、酒戸弥二郎、渡辺漸の4人だという。四手井は私の親父である。

そこで紹介されている9番からなる歌詞は「雪山讃歌」として広く知られているようだが、オリジナルの「三高山岳部歌」とはかなり異なる部分がある。例えば、5番、「吹雪の日には 本当に辛い ピッケルにぎる 手がこごえるよ」とある。「三高山岳部歌」はこうである。「吹雪のする日は ほんとうに辛い アイゼンつけるに 手がこごえるよ」。これが1番であり、オリジナル中のオリジナルなのである。「吹雪のする日は」が本来の題名である。



1928年ごろ、北山小屋の内部で、写真中央のソフト帽が今西錦司

ンとは何のことかわからないので、一般受けするピッケルに言い換えられて、それに真田紐(木綿糸で編んだ組みひも)を通して靴に固定した。歩いているうちに緩むことがある。吹雪の中でそれを装着したり、締め直したりするのはほんとうに辛いことなのである。手袋を外すと、手が凍えることもある。そういう状況を知らないで、歌詞としての意味をなさない。ダークダックスの功罪の一つである

が、ここはオリジナル通り「アイゼンつけるに……」と歌ってほしい。さて、以下が本題である。「三高山岳部歌」4番に「煙い小屋でも黄金の御殿 早く行きたい 谷間の小屋へ」とある。おおむねスキーや雪山を歌った歌詞のなかに突然出てくる「煙い小屋」、奇異に感じる人もいることだろう。実は、西堀さんと切っても切れない「煙い小屋」が京都の北山にあったのだ。

1927(昭和2)年、当時の美津濃が大阪で開催した登山用具展に山小屋を出した。終わったらいらんやろ」と西堀さんがもらって京都へ運んだという。

移築したのは鴨川の上流、貴船山の近くである。西堀さんはこの小屋を三高山岳部に管理させた。さらに2年後、三高から当時の旧制京都一高山岳部に移管される。

1942(昭和17)年に老朽のため解体され、替わって約300坪上流に「京一中北山荘」が新築された。もともと展示会用の「モデルハウス」だから、さほど長持ちはしなかった。

旧小屋には当初、屋根の煙出しもなく、囲炉裏で燃やす薪で燻さ

れるまことに煙い小屋であった。しかし、西堀さんらにとっては親しみ深く、遠くにあつても常に心の中であり、早く行きたいと願わずにおれない懐かしの山小屋だったのである。

新小屋は戦後、一高山岳部を継承した新制高校二校の山岳部が管理を引き継ぎ、現在は一中と両高校山岳部のOB会「北山の会」が管理している。ちなみに、会長は川喜田二郎さんである。「北山の会」は近く旧小屋跡に記念碑を建てる。来年は古い小屋の建設からちょうど80年になる。

参考までに、西堀栄三郎選集に載っている「三高山岳部歌」(吹雪のする日は)を以下に記す。なお、昨今歌われている「俺達あ町には住めないから」の2度のリフレインはない。

一
吹雪のする日は ほんとうに辛い
アイゼンつけるに 手がこごえるよ

雪よ岩よ 我等が宿り
俺達あ町には 住めないからに

二
目の果て知れない 真白の斜面

新ルーム104号室の改装と今後

平山善吉

日本山岳会の運営、活動の拠点として、かねてからの希望であった新会議室が、06年4月7日完成しました。この会議室は日常活動のベースキャンプであり、オアシスの存在として期待され、会の発展の重要拠点とも考えられます。そんな新会議室が創立100周年を機に、新たな山岳会づくりの一環として、完成しました(購入、改修の概要は『山』1月号参照)。

現在のルームは、マンション共同ビル、サンビューハイツ四番町の一部を購入し、事務室、集会所(会議室)、図書室を配して始まりました。以来、会員数や登山活動時代のニーズに合わせて改装、配置換えをしてきましたが、今回の104号室は、同ビルの空室を賃借して利用したもので、使用上の不便をきたしていたことは否めませんでした。

しかし今の山岳会事情として、会員の高齢化、同好会、同期会の増設、運営活動に伴う会議、会合、集会開催の頻度などから、ルームを改修せざるを得ない状況にもあ

りました。そんななか新しいルームを確保し改修したのが、今回の新ルーム104号室です。

104号室は浴室、台所などの住居スタイルの居室でした。このたび会議室を主体とした効率性を考え、可動式間仕切りを設置して、A、B、Cと三カ所に分室できるように設計。定員は、一括して利用(A+B)したテンプルロ型配置の場合は38人、学校方式で42人、椅子のみの講演会方式で77人を収容できる、効率の高い配置を確保しました。それぞれの分室利用としては、A室24人、B室16人、C室4人と、小会議にも対応できます。また、内装、床、天井など落ち着いたカラーを配し、会議室らしいインテリアを施しました。

この104号室の新ルームの完成お披露目会が、4月7日午後2時から開かれました。改装前とは一転して、立派な会議室に変身。思っていた以上のイメージアップ

に、出席者には好評のようでした。また、新たに借室した201号室については、借室のため大掛か

りに手を加えることができません。そのため原型を保ちながら会議室、談話室の利用を考え、3つの部室を改装し、1室は、当面、百周年記念誌準備室にし、その他を資料関係の倉庫および会議室としました。

今回の会議室の完成を見て感じたことは、ルーム管理のあり方と、利用者のモラル、マナーの問題です。新会議室では、飲食物の持ち込み禁止、禁酒、禁煙となっています。また、大声での談笑を謹むなどマンションの一室としてのモラルを含め、十分に配慮していただきたいと思えます。みんなのルームという意識のなかで、有意義な有効利用を実行していきたいと思っております。

また、利用のニーズに応じた公平性、多様性などを考えています。将来は、会員が個人でも利用しやすい空間としての談話室の設置をめざし、より多くの会員の憩いの場を確保したいと考えています。

このルームが、事務所からクラブルームになり、やがてはクラブハウスに、そして、日本山岳会館への夢につながるよう、ルームづくりを進めていきたいと考えております。

さあつと江れ場 あの時煙
雪よ岩よ 我等が宿り

俺達あ町には 住めないからに

三

深い谷間を ラッセルすれば
スキーの上には 新雪五尺

雪よ岩よ 我等が宿り

俺達あ町には 住めないからに

四

煙い小舎でも 黄金の御殿
早く行きたい 谷間の小舎へ

雪よ岩よ 我等が宿り

俺達あ町には 住めないからに

五

天幕の中でも 月見ができる
雨が降ったら ぬればいいさ

雪よ岩よ 我等が宿り

俺達あ町には 住めないからに

六

荒れて狂うは 吹雪か雪崩
俺達あそんなもの 恐れはしない

雪よ岩よ 我等が宿り

俺達あ町には 住めないからに

七

雪の間に ちらちら光る
明日は登ろうよ あの頂上に

雪よ岩よ 我等が宿り

俺達あ町には 住めないからに

七

雪の間に ちらちら光る
明日は登ろうよ あの頂上に

雪よ岩よ 我等が宿り

俺達あ町には 住めないからに



経ヶ岳から坊主山へのルート、左奥は御岳、右奥は穂高方面

で汗。1820mに2日目のテント。21日、雪と風の夜が明けて朝快晴。林の中を進んで1850mピークに達す。B班も苦戦連続でドッキングは交信で無理と判断、藪と腐った雪の尾根を横川谷に下る。

〈B班〉3月19日、サポート隊と別れてすぐルートを見失う。低木の密集した雪道は重荷が肩にきつい。登り通して尾根に出る。地図は役に立たず、経験と第六感が頼りか。股まで埋まる雪と藪に苦戦しながら小さなピークをいくつも越えて、1540mにテント。20日、高曇りの風のない尾根筋を進む。朝のうちは雪もクラスト気味で歩けるが、10時頃になると相変わらず股までもぐり消耗はなはだしい。夕方から雪、風も出た。1670mにテントを張る。21日、A班との交信の結果、本日のドッキングは諦める。時間が足りない。横川谷に逃げることにする。来年(2006年)同じ頃また来て100%にするつもり。山はそこにあるし、残された難物も、また楽しみでもある。雪のとけ始めた南向きの尾根を泥だらけになって進み、林道でA班に合流。ヒマラヤ経験豊かな猛者達もさすがに「今回は参った」と。

覚悟はしていたが大物コースだった。ほとんど樹林帯のため、風の通りがないので雪がしまらず歩きにくく、藪と熊笹ではワカンも使えない。また見通しが悪く現在地を確認できない苦労も。久しぶりに充実(?)した汗苦行であった。(中野和郎)

休山会

趣異なる山行を満喫

休山会の分担地域は、長野県と群馬県の県境になる十石峠から県境上を南に向かい、長野県と埼玉県境に入った三国峠まで、地図上の平面距離でおよそ21kmの山嶺である。日本を代表する信濃川、利根川の2大河川と、埼玉県域は荒川の分水嶺にあたり、西はJR小海線を挟んで八ヶ岳連峰を望み、東は、日航機墜落で

有名になった御巢鷹山と隣り合っている。群馬県側は、秩父山群の最奥部にあたり、鉄道からも遠く、分水嶺への取り付きも急峻である。それで、小海線側からアクセスすることとなり、2004年5月、11月、2005年5月と3回に分けて踏査を実施した。踏査時期は、できるだけ多くの会員の参加を期待し、雪山と夏場の雑草繁茂を避けて決定した。

初回は、分水嶺を横切る車道である十石峠からぶどう峠までテント泊で実施し、2回目、3回目はそれぞれ前日旅館泊とした。十石峠から三国峠まで全体で、5泊8日間(山中5日間)で踏査したことになる。

最大の痛恨事は、2004年11月、第2回踏査中に、Hさんが急逝したことである(急性心不全)。長野県警のヘリコプターで身柄を収容していただいたが、レスキュー隊員の方々には、特段のお世話をかけてしまった。

踏査の5日間は、山道の状況、分水嶺へのアプローチ方法、季節、日ごとの天候等それぞれに極めて趣の異なる山行であり、参加者全員が普段の登山と別種の体験を懐かしんでいる。(鈴木秀郎)



ぶどう峠出発地点で(2004年11月14日)

中央分水嶺踏査委員会事務局より

2004年7月号から隔月で各支部および首都圏同好会に担当していただいたこのコーナーは、今月号をもって終了します。執筆いただいた25支部および14同好会の皆様に厚く御礼申し上げます。踏査は6月17日、信濃支部との共催によるフィナーレ踏査(会報『山』4月号に案内掲載)をもって終了する予定です。その後、各山行報告書はCD-ROMに収めるとともに、同踏査プロジェクト全般の最終報告書を単行本として本年12月を目途に出版し、来年3月をもってすべての作業を完了する予定です。今後とも、会員各位のご協力を賜りたく、よろしくお願いたします。(森 武昭)



中央分水嶺踏査



踏査率：94.1% (2006.4.25現在)
延べ947日、4925人参加

福島支部

俺よりひどいやブ！

県境となっているところが多い中央分水嶺だが、福島県では、それが県土のほぼ中央を貫いている。また、県内には日本海と太平洋の両方に水が流れている水源が2つある。尾瀬と猪苗代湖である。こと分水嶺に関しては、福島県はかように特異な状況にあるといえる。

他支部同様、福島支部も会員の高齢化が進んでいるため、踏査完遂に関して悲観的な意見もあった。が、ともかく「やってみっぺ (やってみよう)！」。会員の負担を軽減するべく、まず登山道が整備されていて、日帰りできるところから踏査することにした。

最初は、2004年7月25日、安達太良山から土湯峠までのルートで、御年82歳の会員を含む6名が参加した。終日雷鳴が轟くなか、何とか目的地の新野地温泉までたどり着き、露天風呂とビールで疲れを癒した。この温泉旅館のご主人も日本山岳会の会員であり、サポート要員に名を掲げることにした。

その後、同年8月、10月、11月、12月と踏査を行なったが、いずれも日帰りで、参加者の足取りもゆった



楽しい!? 藪こぎの後、鶏峠直下にて

りとしたものであったので、思うように踏査距離を延ばすことができなかった。また、いずれの踏査隊も同様と思われるが、大きな障害となっているのが、藪こぎである。コースタイムの予想がまったくたらず、方向も見失いがちで、体力を消耗すること甚だしい。諏訪峠から笠ヶ森山への登りでの藪こぎの際、医師である渡辺千代蔵会員 (実はこの方が82歳) いわく、「いやあ、ここは俺よりひどいやブだあ!」。藪こぎで楽しかったことと言えば唯一これのみか!?

2005年秋からは、広く支部会員に参加を募る一方、その地域を熟知した少数の精鋭会員に踏査を依頼している。この冬の厳寒と大雪で実行が遅れ、計画を練り直しているが、本年5月にはすべて終わるよう、鋭意奮闘中である。
(武藤伸彦)

信濃支部

大物コースに脱帽

一昨年7月、山梨県清里から始まった踏査行は95%ほど消化したが、残された権兵衛峠～牛首峠は最大の難物である。地元民も営林署もここを知る人は誰もいない。2度の偵察も先の見通しは暗いが残雪期決行。経ヶ岳を登って牛首峠を目指すA班。牛首から経ヶ岳に向かうB班。共に2泊3日でドッキングを試みる。

〈A班〉3月19日、重い荷物と雪に喘ぎ六合目からはワカンを着け、カラマツ林を抜けて経ヶ岳 (2296m) に午後2時30分到着。北に向かって稜線を辿り、ダケカンパの林の中に幕営。20日、「ニセ坊主」を通過し、やせた岩稜と藪こぎ。雪底に注意しながらアップダウンの激しい雪稜を進んで12時30分、坊主山 (1965m) 着。360度の眺望を堪能し、中央アルプス最北端のハイマツを確認。相変わらずのラッセルと藪こぎの連続

支部



だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

秋田支部

伝説の山「犬吠森」に登る

4月10日、今年の戌年にちなみ、県北部・鹿角市にある獵犬シロの伝説の山「犬吠森」に登り、併せて分水嶺・与須毛堂森から白萩平までの踏査を行なった。

参加者5名は、5時に秋田市を出発。鹿角市十和田大湯を経て7時50分、秋田と青森の県境である境の来満牧場から、与須毛堂森を目指して登り始めた。久しぶりの快晴に雪の白さが目にしみる。一昨日の雨がこの辺りでは雪だったらしく、新雪に足をとられながらの登りとなった。9時15分、与須毛堂森着。十和田山、戸来岳、八甲田連峰の青森県の間々、そして四角岳、中岳の県境の間々が雄大に広がり美しかった。

ここから犬吠森に向かうが、雪

庇に亀裂があつたのが新雪に覆われていて気づかず、片足を落としてしまった。そろりそろりと這いあがつて立ち上がった。また落ちた。2番目の亀裂はかなり深く、足が中に浮いていた。

この先、ブナの稜線を辿り、西側に続くピラミッドのように聳える犬吠森に11時30分着。山頂の木には赤いリボンが結ばれていた。



犬吠森頂上にて

登山道もないこの山に、干支の山ということに登る人もいるらしい。この山には、誤って処刑されたマタギの主人・佐多六を慕い、三戸城の見えるこの山の頂から恨みの遠吠えを何日も続けたという、獵犬シロの伝説がある。その獵犬シロを偲んだ。

昼食後、続いて分水嶺踏査を開始する。与須毛堂森直下の分水嶺分岐に戻り、ここから踏査が始まる。分水嶺尾根のブナが美しい。

来満牧場の東端を目指して急尾根を下り、牧場から小山を越えて白萩平の国道に16時20分着。小雪がちらつく国道をゆつくりと歩き、駐車地点に着いたのは17時だった。

(鈴木裕子)

石川支部

白山南北縦走

創立100周年記念事業の一環である分水嶺踏査も完了し、石川支部の記念行事は残すところ「白山南北縦走路踏破登山」となった。北は白山スーパールイン道の三方岩トンネル出口に始まり、北方稜線から白山主峰を越え、更に別山から南方稜線を岐阜県石徹白まで39キ。



縦走路より大汝山と地獄谷を望む

を踏破するもので、数ある白山登山コースの中でも最も長大なコースである。このコースの問題はアプローチにある。送り迎えの協力がなければできない登山なのである。

2005年9月17日、尾口道の駅に午前7時に集合し、スーパールイン道を三方岩駐車場へと急いだ。本隊は岡本・大庭夫妻・木原・澤村・中川で、妙法山往復の安田・小畑、室堂で下山する織田・内藤、そしてサポーター隊の津田支部長・東野のメンバーである。8時40分、登山開始。9月というのに暑い日であった。ひと汗かいて三方岩岳(1736メ)に着。津田支部長の見送



出迎えを受けて (銚子ヶ峰山頂)

りを受け早々に出発。ここからは登山者も少なくなり歩きやすい。ひと歩きし、振り返ると三方岩岳の飛騨岩が城壁のように構えている。野谷荘司山(1797トビ)10時15分着。岐阜側は登山道のすぐ下まで、斜面がザレている。緩やかなアップダウンを繰り返すと、小さな池塘のあるモウセン平。ここで東野と別れ、妙法山には13時35分着。調子の悪い澤村は、安田・小畑組と下山した。念仏尾根を過ぎて、いったんシンの谷まで下り、尾根を一つ跨いで山腹を巻くと、やがて中宮道と合流する。ここに、今日の目的地ゴマ平ヒュッテがある。16時50分着。

18日は6時30分出発。ヒュッテの裏からいきなりつづら折りの道に登る。主稜線に出て山腹を巻くと突然御前峰、大汝山、七倉山の朝日に輝く稜線が見え、意欲をかきたてられる。間名古ノ頭(2124トビ)から北弥陀ヶ原へと続く登山道からは、右手に仙人谷、地獄谷の断崖が地獄絵のように続く。うぐいす平の「地獄観」から見下ろす火ノ御子峰の赤茶けた岩壁は、恐ろしいほどの圧巻である。踵を返すと北弥陀ヶ原の美しい池塘とお花松原のなだらかな草原。まさに、天国と地獄の狭間に立っているようだ。ここからギアチェンジで御前峰(2702トビ)に12時40分到着。町中へ戻ったような人混みをさけ、早々に室堂へと下りる。下山組の織田・内藤と別れ、本隊は今日の目的地、南竜ヶ馬場へとふた手に分散した。一隊は美濃禪定道を忠実にたどる意味からトンビ岩コースを、もう一隊は大白川との分水嶺を辿る展望コースをとった。展望コースでは埴崎・池本両会員がコーヒーを沸かして待っていてくれ、嬉しい出迎えを受ける。南竜ヶ馬場では7名が余裕で寝られるバンガローに泊まる。

最終日、小雨の中を6時15分に出発。この雨は、別山(2399トビ)山頂に着く頃にはガスに変わっていた。本日のうちに石徹白へ下りるので、皆、次第に足早になる。三ノ峰、二ノ峰、一ノ峰と恐竜の背を辿るように下っていくうちに、天候も次第に回復し、暑くなってきた。岐阜県に入り銚子ヶ峰(1810トビ)が指呼の距離になったとき、「オーッ」とコールがかかった。たどり着くと太田・村上・東野と会友の廣瀬が出迎えてくれ、労いのビールが本場に旨かった。振り返ると今下ってきた道

がうねりながらガスの中に消え、時折別山が秀麗な姿を見せていた。そのまま寝そべっていたい気持ちを抑えてさらに下る。「母御石」「おたけり坂」と泰澄大師の伝説にまつわる道を下山した。15時40分、石徹白の大杉(樹齢約1800年、特別天然記念物)に辿り着き、皆、満面の笑顔で握手。駐車場で池内会員の出迎えを受けた。南北39キは長かった。改めて白山の大きさを実感するとともに、仲間にも恵まれた支部に在籍したことを、心から幸せに思う山行であった。(中川博人)

日本山岳会創立百周年記念出版

新日本山岳誌

日本山岳会・責任編集

菊判(1992頁)上製/クロス装/カバー掛け/函入り 定価18,900円(税込)

日本全国4000山の情報を網羅!

折込・国後など北方四島の山から、南西諸島の山々まで、日本全国の山に登った、撮った、調べた、そして書いた。日本山岳会の全国25支部約500名が総力をあげて編集執筆にあたった最新・最大の山岳百科が ついに完成!

△ 推薦のことば △

日本山岳会二代会長高頭式氏による「日本山岳誌」から百年、山岳の現況を記述し後世に残すべく、百周年記念事業として本書ができました。
日本山岳会会長 平山 善吉

▶新刊◀ 旗 振 り 山

柴田昭彦著/A5判328頁/定価3,000円(税込)
山から山へ電話が通じる前の通信システムの全貌を解明。

▶近刊◀ 大峯奥駈道七十五トビ 摩 (仮題)

森沢義信著/A5判312頁/予価3,500円(六月上旬刊)
吉野から熊野まで、修験道の道を克明に探査。写真多数。

ナカニシヤ出版

〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15番地
Tel.075-723-0111 Fax.075-723-0095
URL <http://www.nakanishiya.co.jp/>

活動報告

日本山岳会の
同好会の
各委員会、
活動報告です

総務委員会

支部長・支部事務局担当者会議

2月25～26日、山梨県富士吉田市「富士研修所」で支部長・支部事務局担当者会議を開催した。支部長会議や支部事務局担当者会議が都外で開催されるのは初めてのこと。当会改革の一環として実施したものである。

会議は、古屋山梨支部長挨拶の後、平山会長が基調講演を行った。会の現状、課題として会員の減少、財源、少子高齢化などの問題をグラフなどの具体的数値によって示した。また、組織改革の必要性や公益法人への改革、サービ部門の強化、支部の独立した活動などを提案した。

次に、事前に依頼したアンケートをもとに、各支部からの事業報

告が行なわれた。中央分水嶺踏査の進捗状況のほか、とくに公益性の高い事業活動報告、また鹿児島支部設立を準備していることの報告もされた。

会議終了後、懇親会が開かれ、各支部から寄せられた地酒を酌み交わし、遅くまで賑わっていた。翌日は雪、8時30分より昨日に引き続き会議が始まった、事務的な報告の後、平林副会長の講演があった。平林副会長は、志のある若者を受け入れていくためには日本山岳会の考え方を変えなければならぬと述べた。

吉永総務担当理事からは、公益法人改革、組織改革、事業運営、委員会の統廃合や広報活動の必要性、集会所のサロン化と図書室の拡充の計画などについて説明があった。

神崎総務委員長は、世界の登山界と日本の登山界の現状について

比較、解説した。

続いて、田邊副会長の司会で、支部からの要望と、報告が行なわれた。そのなかで、北海道支部、東海支部、宮崎支部からの報告は公共性が高く、注目された。

最後に、橋本副会長が会議を振り返り、「いい山登りをやっていけば、おのずと若い人がついてくる」とまとめ、閉会となった。

(永田弘太郎)

医療委員会

実技講習会「山で起きやすいケガの応急処置と搬送法」

2月6日、実技講習会を恵(いさお)秀彦委員を講師として、東京体育館で行なった。止血法、そのほかの捻挫などのケガの処置、搬送の基礎について60名近い参加者は熱心に耳を傾け、メモを取っていた。

最初に事故現場で行なうことは、安全の確認、緊急連絡、事故者の評価、応急手当、搬送の順になる。

ケガの応急処置のポイントは止血、救助者の感染予防、痛みの軽減である。ここで、感染を防ぐために手袋の脱着と処理方法を練習

した。出血を放置すると血液が減少して、血圧低下や頰脈をきたす。全身の血液の量は体重の8割である。その10～20割の軽度の出血では症状は一過性であるが、出血が進んで20～30割になると血圧低下や顔面蒼白などのショック症状を呈し、30割以上では意識障害、呼吸障害などをきたして死亡する場合もある。止血の基本は5分前後、局所を直接圧迫し、その後、保護ガーゼをあて、包帯を巻く。

講師は、ビニールシートの上で200gの缶コーヒーの中心を撒いて、おおよその出血量を把握すること、冷静に判断する必要性を説いた。また、包帯と三角巾の使用法と止血法の実技を行なった。切り傷、擦り傷、捻挫などのリアルなモデルと、スタッフの迫真の演技に会場が盛り上がった。また、水を入れたビニール袋の角を切つて、袋をしぼるようにしながら患部に加圧注水する洗浄法も紹介された。三角巾を用いて円座を作り、患部を保護する方法も、参加者に興味深い様子だった。

骨折、捻挫、筋肉などのケガでは症状が悪化する前に応急処置を行なう。評価法としては、LAF



スタッフの迫真の演技による実技講習会

(Look And Feel) → 「見る」、「触れる」が原則で、「見るもの」は、D O T S (Deformities, Open wounds, Tenderness, Swelling) → 「変形、開放創、圧痛、腫れ」である。骨折では出血量は必ずしも外見上からはわからない。上腕骨折で300〜500ミリリットル、下腿骨折で500〜1000ミリリットル、大腿骨折で1000〜2000ミリリットルなどで、大体の出血量を感じておくことが必要である。

処置はRICE療法が肝要であり、「Rest」「安静」「Ice」「冷却」、Compress「圧迫」、Elevate「患部の挙上」、これにSのSupport「補助」をつけて副木などによる固定

をする場合もある。

次に、実技で足首や膝の捻挫の損傷例やふくらはぎの痙攣、骨盤骨折に対する、具体的な処置法や固定法を見せた。靴を履いたままの足首捻挫固定法など、有効性が高いと思われた。

最後に搬送法について実技で示した。頸部損傷をしている場合もあるのに、声をかけるときは傷病者の視野から動かないよう注意しながら近づくようにとのことであった。ザック、あるいはザックとツエルトを用いた背負い搬送法を示した。疲れないように交代したり、周囲のものがサポートしながら搬送する必要性も強調した。

講演後のアンケートは好評であったが、時間が不足していたという感想や、繰り返し講習を受けたという声もあった。

(野口いつみ)

新土曜会

講演会「日本の南極観測・探検の時代」

2月18日、山岳会集會室において、新土曜会としては初めての試みである講演会を開催した。演題

は「日本の南極観測・探検の時代」として、極地やヒマラヤのベテランである電通大名誉教授、芳野尠夫氏(日本山岳会々員)に講演していただいた。当日は、本部主催の「マナスル登頂50周年記念イベント」と重なったためか参加者は10名であったが、興味深い、感動的な講演であった。

昭和31年に始まった日本の南極観測は国際地球観測年の一環で、探検ではなく観測であるという位置づけがなされていたが、初期の南極観測隊は当然のことながら探検の側面を有していた。果たして基地を作って越冬することができると、冬の気象条件はどうなのか、周辺の地理状況、雪氷の状況等々未知のことばかりであり、それを経験として積み上げていくことは探検そのものであったと言っても過言ではないであろう。

第3次隊(昭和33年出発、35年帰国)で越冬の経験をした芳野氏が見せてくれたスライドは、第19次隊で越冬した筆者の体験とは大違いであった。昭和基地の建物も現今から見ると貧弱そのものである。もっとも、野外調査に出かけてブリザードにつかまり、昔風の

ウィンパー型テントの中で全員必死でポールを支えていたなどという越冬生活にあつては、基地の建物は金殿玉楼であつたらう。衣食住のすべてにブアーではあつたが、一方、露岩地帯のどの山に登つても初登頂であり、隊員はみなパイオニア精神に富み、活気にあふれていたように思えた。

芳野氏はのちに第17次隊で隊長として越冬したが、隊長という苦勞は別として、第3次隊と比べて生活条件は雲泥の差であつたと往時を振り返って述べられた。

(箕岡三穂)

カラコルムは、トレッカーを待っています。

K2・バルトロ氷河ヘリ・フライトとコンゴルディア着陸12日間
 出発日：6/26・7/17・8/28・9/18発
 旅行代金：538,000円～548,000円 [東京発着]

K2・バルトロ氷河トレッキング 25日間
 出発日：6/16・6/30・7/28・8/25・9/8発
 旅行代金：560,000円～620,000円 [東京発着]

国土交通大臣登録旅行業第490号 / 日本旅行業協会正会員 ③ 東コン協賛会員

ALPINE ツア サービス 株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
 大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
 e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

今井喜美子名誉会員 追悼



2006年3月27日没
享年100

100歳の昇天

小倉董子

女性登山の先駆者であった今井喜美子先輩が、亡くなられた。100歳の天寿を全うし、最愛のパートナーであった夫・雄二氏の待つ山の彼方へと昇天した。当会創立と同じ1905(明治38)年生まれの前喜美子先輩は、奇しくも日本山岳会の歴史とともに生きてきたということになるだろうか。

最後のお別れの対面でのお顔は、童女のように華やいでいて、今も私の胸の奥に焼きついている。

7歳の時の榛名山登山が、初めての山との出会いだったという。生来の好奇心と冒険心が、山へとかりたてたのだらう。昭和初期から戦後の40年余り、女性登山の先

駆者として活躍することになる。スキーにおいても赤倉などで腕を磨き、後に指導員として活躍する。

28(昭和3)年からは登山家であった夫の雄二氏をパートナーに、源次郎尾根や八ツ峰、穂高滝谷やジャンダルムなど、ロック・クライミングに熱中した。

49(昭和24)年、日本山岳会に婦人部を設立、メンバーとして懇親会や団体行事にも参画。

68(昭和43)年、63歳の喜美子先輩は夫とカナダのロブソン周辺でロック・クライミングを楽しみ、『心に山ありて』を共著で出版した。この山旅が、おしどり登山家の最後を飾るものとなった。

生涯多くの岳友や弟子たちに慕われ、山旅や酒宴に招かれた。ひとりの人間として、女性として精いっぱい生きて晴れ晴れとした人生であったに違いない。

今井喜美子(いまい・きみこ)

1905年、草加市に生まれる。1928年、23歳で登山家の今井雄二氏と結婚。その後、夫とともに源次郎尾根や八ツ峰、穂高滝谷やジャンダルムなどを登攀。女性登山先駆者の一人であった。

小谷隆一さん 追悼



2006年3月23日没
享年81

海外登山の友好と絆

塚本珪一

小谷隆一さんは京都第二商業学校に入学し、森本次男氏と出会った。今西錦司氏の京都北山の発見と、森本氏の心の糧としての京都北山には、「京都北山からヒマラヤへ」という伝承があり、それは極地・ヒマラヤへと誘った。

森本氏の登山を継承されると同時に、松本高校、東大山岳部の知の系譜も持つておられた小谷さんの所には青年が集まり、海外登山の夢を熱く語り合っていた。

1965年、小谷隊長以下9名はカラコルム・ディラン峰へ挑んだ。登山の記録ともいえるドクタ―北杜夫の『白きたおやかな峰』では、小谷隊長の知的で暖かいリ

ーダー像を描いている。この私たちの最初のヒマラヤ登山は、7月9日に登頂を断念した。そして、これを契機に「京都・カラコルムクラブ」を結成。カラコルムや中国西部山域での意味のある多くの登山が続けられた。

89年のコングール峰登山では、7月11日に9名全員が登頂。中国登山協会の史占春主席は、和を持って小谷さんの知と仁を常に温かく迎えてくださった。小谷総隊長からは、若い登攀隊員のチームワークの良さや技術のすばらしさを褒めていただき、ディラン峰登山の時から命題をやつと解決できた思いであった。

中国の登山開放から数十年の間に、友好という絆とその再認識の時間を青年たちに与えてくださった小谷さんに、改めて感謝したいと思います。

安らかに眠りください。

小谷隆一(こたに・りゅういち)

1924年、京都に生まれる。1965年、京都府山岳連盟カラコルム・ヒマラヤ登山隊長としてディランに挑む。京都府山岳連盟会長などを歴任。

N
 東 西 北
 南 北
 S

ハインリッヒ・ハーラーの死

岡澤祐吉

グリーンデルワルト近辺からだ
 近すぎてよく分からないが、イン
 ターラーケンの西にあるシュモツ
 ケンという所から出ているケーブ
 ルカーに乗って、10000^{ft}ほど
 上がると、ニーデルホルンとい
 う格好の展望台がある。天気がよ
 ければ遠くモン・ブランも見え
 るし、

マッターホルンも見える。そこ
 から眺めるアイガー、メンヒ、ユ
 ングフラウ、特にアイガー北壁は
 降雪の後だと「白い蜘蛛」と呼ば
 れる部分、まさに蜘蛛の糸を張り
 巡らした巣のように見える。

この「白い蜘蛛」のタイトルで
 アイガー北壁初登攀の様子を書
 いたハインリッヒ・ハーラーが
 今年1月7日、93歳で亡くな
 った。アイガー北壁初登攀者4
 人のうち最後

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

まで生き残った一人だった。彼の集めた収集品が展示してあるチベ
 ット博物館の所在地、ヒュッテン
 ベルク近くにあるフリーザッハ市
 内の病院で亡くなったというから、
 老衰による死亡だったのだろう。

ザルツブルク通信によると、ハ
 ーラーはこの博物館があるヒュッ
 テンベルク村に1912年に生ま
 れ、オーストリア第二の都市、グ
 ラーツで体育学と地理学を学び、
 その学資を得るため、スキー教師
 をしたり、山岳ガイドをした、と
 ある。この頃のハーラーは優れた
 ランナーで、オリンピックにもオ
 ーストリアの選手として参加し、
 選手団の旗手も務めたという。ザ
 イルシャフトのカスパレクとも
 にグリーンデルワルトに向かった
 は、最終国家試験を済ませた後だ
 ったとのこと。北壁登攀の様子は
 ささまざまな本で取り上げられて

る。

アイガー北壁成功の後、ハー
 ラーは招かれてドイツのナンガ・パ
 ルバート遠征隊に加わった。この
 遠征隊は成功しなかったが、デイ
 アミール側からのルートを見つけ
 ている。この遠征の帰りに第二次
 大戦が勃発して、ハーラーたちは
 イギリス側の捕虜となり収容され
 た。この後、インドにあったその
 収容所から脱走を4回試み、5回
 目に成功し、21カ月間、2000
 *に及ぶ逃避行のすえ、チベット
 に逃げ込んだ。数年前に『チベッ
 トの七年』という、ブラッド・ピ
 ット主演の映画が上映され、この
 伝説的な経歴の登山家、というよ
 りは探検家のことが話題となっ
 たから、記憶に残っているであら
 う。

南米、グリーンランド、アラス
 カ、アフリカ、ハワイ、タヒチ、
 ニューギニアなどの学術調査に行
 ったとき、彼は30もの初登頂を行
 なっている。

ハーラーの埋葬式には、彼が教
 師となり相談相手にもなったダ
 イ・ラマは出席しなかったとい
 う。ドイツやオーストリアの反応に
 比べると、スイス山岳会のハー
 ラーに対する扱い方もかなり控えめ

ある。ハーラーがナチの親衛隊員
 であったことが今も尾を引いて
 いるのかもしれない。

年寄りが知っているような著名
 人は落ち目だと、ひと世代若い人
 が口にするのを耳にしたことがあ
 る。そんな著名な登山家が次々と
 歳を重ねて他界していく。たしか
 ヘックマイアーもどこかで書いて
 いたように思うが、その人達は理
 想に向かって挑み、自分しか経験
 しなかった大切なものをつかみ、
 それを持ち続け、歳を重ねて、平
 安のうちに一生を終えていったの
 だと思ふ。

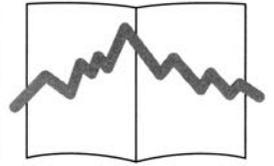


ATLAS TREK

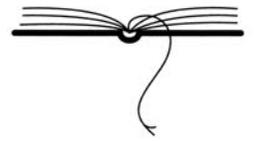
個人手配旅行から人気のトレックツアーや
 エクスペディションのアレンジまで。充実
 度が違う「旅」のプランニングをここでが
 けています。山旅などあらゆるジャンルを
 取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック
 (国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京 / 〒160-0008 東京都新宿区三栄町25	三栄ハウス202	TEL 03-3341-0030
大阪 / 〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5	中央谷町ビル501号	TEL 06-6946-9111
名古屋 / 〒464-0807 名古屋区千種区東山通り5-113	オークラビル6F	TEL 052-788-2422



図書紹介



小林尚礼・著

『梅里雪山』 十七人の友を探して



2006年2月 月刊
山と溪谷社刊 303頁
A5判 定価 2300円

1991年1月、雲南省の未踏峰梅里雪山(6740m)を目指し日中合同登山隊の17名が消息を絶ち、日本の海外登山史上最悪の遭難となった。17名中11名が京都大学学士山岳会(AACK)を中心とする日本隊員であった。

当時、京大の現役山岳部員であった著者は、この信じ難い報せを受けた後、救援隊の準備、同期生であった隊員の留守家族への応対などに奔走することになる。何の消息もつかめず絶望視され

たまま5年の歳月が経ち、1996年に再挑戦を目指す登山隊に社会人となった著者は参加する。山麓の住民(チベット人)に抵抗されつつも頂上間近まで迫ったこの隊も、天候悪化の兆しで登頂を断念し、遭難隊の痕跡も確認できぬまま撤退を余儀なくされた。

さらに2年後、現地住民より氷河上で最初の遺体発見の報せをうける。収容隊に参加した著者はその後勤め先を辞職し、写真家への道を進む。翌年、さらに遺体、遭品の発見が続くと、AACKで現地に常駐者を派遣する方針が打ち出され、著者に白羽の矢がたてられた。

梅里雪山の主峰カワカブを聖山と崇め、これを汚すと考えられた登山隊にこれまでたびたび抵抗してきた山麓の村人達だったが、單身村に入った著者は、まずは村長一家に受け入れられ、以後幾度と

なく長期滞在を繰り返し、7年の歳月が経つ。

村人と暮らし、遺体捜索活動のかたわら聖山カワカブ一周の巡礼を繰り返していくうちに、著者にとって登山の対象でしかなかったこの山への思いが変化し始め、ついには「この山には登ってはいけない」と思い始める。著者は「聖山とは何か」を追い求め、自分の旅を「聖山に出会う旅」と位置づけた。残る1人の遺体が見つかるまでこの旅はまだ終わらない。

本書は『岳人』誌に連載されたものを加筆、修正、再構築したものである。副題にも示されるように重いテーマだが、たぶん著者の人柄が表われた筆致によるものだろう、読後感は爽やかで明るい。急速な近代化の波に洗われるなか、世界遺産にも登録されて観光地化の進む山麓の暮らしの変貌ぶりも興味深い。多数の写真が、著者の写真家としての腕の冴えを見せている。

なお、著者は1999年JACC有志隊に参加し、チベットの未踏峰リャンカン・カンリ(7535m)の初登頂を果たしたことを付記しておきたい。(越田和男)

内田陽一・著

『五十歳からの挑戦』 アルプス4000m峰36座登頂



2005年12月 月刊
東京新聞出版局刊 264頁
A5判 定価 1600円

著者のエネルギーシユな行動と、熱い思いが感じられる興味深い本である。ヨーロッパのガイド付き登山がどういうものか知りたい人や、ガイド付き登山を志す人には必見の書であろう。

「水筒の水を飲んだらガイドに叱られた」ガイドに5分の休憩をもらって着替える事にした。ところがガイドは怒った。など、ガイドとのやりとりの実例をあげ、ガイドの行動に疑問を抱いている。その一方、ガイドは100%不要、といいきつてもよい山だ。のブライトホルンで毎年ガイドをしていた私は、アプローチのヒドンクレヴァスに落ちた他人を2年続けて見ている。アルプスの山中ではアプローチの氷河地帯の方が危ない。など、著者のガイドとしての体験も綴られている。また、他



2005年11月
 剣山頂上ヒュッテ刊
 A 5判 105頁

『剣山物語』
 頂上ヒュッテ50年の歩み

新居編男・監修／尾野益大・編

の山で「ここからは一人で帰れま
 すから」と申しでた。(中略)「馬
 鹿なことを言うな。クレヴァスも
 あるし、そんなことしたら私のガ
 イド業も終わりだ」とガイドが大
 声で言い放った」など、さまざま
 なガイドが登場する。

この本の帯には「ヨーロッパ・
 アルプスに憧れる中高年登山者へ
 の最高のガイドブック!」とある。
 しかし、この書の中の体験記、役
 立つ情報、視点、守備範囲、文章
 量などから、著者の持つ卓越した
 能力を読み取ってほしい。著者が
 体力、気力に加え、人並み外れた
 調査力、他人とのコミュニケーション
 力、および幸運の持ち主だとい
 う事がわかると思う。

アルプス登山を視野に入れ、あ
 くまでガイド付き登山を志すつも
 りで読んでほしい。(今井通子)

四国の剣山頂上ヒュッテが開設
 50年を迎えたのを機に発行した記
 念誌である。内容はヒュッテの物
 語、剣山の物語、剣山測候所物語、
 資料編から成っている。

ヒュッテの物語では、初代の新
 居熊太が山頂にヒュッテを開設し
 てからの50年の歩みと、その変遷
 が貴重な写真とともに綴られてい
 る。剣山の物語では、剣山の山名、
 地形と植生、登山道、山岳信仰な
 どについて、興味あるトピックス
 を交え解りやすく述べられている。

剣山測候所物語では、同じ山頂
 で山岳の気象観測を60年間続けた
 剣山測候所(平成13年に閉鎖)の
 歩みをレポートしている。資料編
 には、剣山に関する気象データ、
 山頂からの展望スケッチ、ヒュッ
 テの年表などが添付されている。

剣山は本来山岳信仰の山であつ
 たが、山頂ヒュッテの開設にとも
 なって観光の山へと大きく姿を変
 えていった。ヒュッテ50年の歩み
 は、同時に剣山の登山史でもある。
 本書は、剣山の概説書としても参
 考になるだろう。

本の問合せ ☎ 088-623-14

533

(松家晋)

The Alpine Club・刊
 『The ALPINE JOURNAL 2005』



Ernest Press発行
 432頁

世界の登山情報を集めた『The
 Alpine Club』の機関誌。写真を眺め
 るだけでも楽しい。「カンチエンジ
 ユンガ初登頂50年特集」は、昨年
 8000以上の峰14座に登頂したヒ
 クスの報告である。

「登攀」では、「Japanese Alpine
 News」に刺激されチベットに入つ
 た2隊の報告やユーコンの山々、
 ベルー、チベット北西部、ガルワ
 ール、クーンブ、バルトロでの初
 登頂や初登攀を掲載している。

「旅行」には、カラコルム北西端
 のシムシャルからバルトロ氷河
 経由フーシエまで260kmをスキ
 ーで37日間の初縦走や、中村保氏
 の未踏のベナ谷訪問とチベットの
 登山許可問題の真相などが掲載さ
 れている。

「アルプス」では、モン・ブラン
 のイタリア側に新ルートを開いた
 『アメリカン・アルパイン・ジャー

ナル』編集長の登攀記事が目を見
 にく。また、昨今の温暖化で登攀が
 危険になり、過去の登攀グレーデ
 イングと合致しない箇所があると
 警告している。

「論点」では、イタリア隊K2初
 登頂時の酸素使用疑惑を取り上げ、
 登頂者と酸素を担ぎ上げたポナッ
 ティのしこりを浮き彫りにしてい
 る。「文芸」では、22年のエヴェレ
 スト隊員、英国山岳会会長を務め
 たサマヴェル(外科医で画家でも
 ある)や、英国の詩人ワーズワ
 スなどが語られている。「歴史」で
 は、ハインリッヒ・ハーラーがア
 イガー北壁での出会い後、宿敵か
 ら終生の友となり、昨年98歳で亡
 くなったヘックマイヤーの功績に
 ついて記している。

登頂・登攀報告の中で岩場など
 難易度が各国隊独自で格付けされ
 ているので、国際的に統一された
 基準がほしいと感じる。

「書評」28冊の中には、中村保著
 『チベットのアルプス』も紹介され
 ている。「追悼」は日本山岳会名譽
 会員でもあったフォスコ・マライ
 ーニ氏の日本での功績を評価して
 いる。

(南井英弘)

会務報告

4月理事会

日時 4月12日 18時30分～20時

20分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】 平山会長、橋本・田邊各副会長、吉永・賛田各常務理事、石田・篠崎・大蔵・野口・斎藤・藤井・石橋・古野各理事、山本監事、小倉・重廣・今村各常任評議員

【委任】 平林副会長、渡邊理事、一力監事

●議事に先立ち、平山会長より新年度を迎え、今後、公益法人としての活動が益々求められる。5月20日に予定されている平成18年度通常総会への提出議案について十分な検討をお願いしたいとの挨拶があった。

【審議事項】

1 平成17年度事業報告(案)および収支決算(案)について

総務担当吉永、財務担当賛田各

常務理事より説明があった。事業報告(案)については平成17年度

通常総会において承認された計画に基づき実施され、特に創立100周年関連事業を中心とした活動が精力的に実行されたとの報告があった。収支決算(案)については会費収入の減少状況、およびルーム改装費1378万円を創立100周年記念事業特別会計より繰り入れ、資本的支出となる1168万円を資産勘定とした旨が財務諸表により説明され、検討の結果、承認された。

(承認)

2 創立100周年記念特別会計・平成17年度中間決算(案)について

記念事業(委)・吉永財務副委員

長より、平成18年3月末現在、収入1億346万4784円(うち募金等7177万6229円)、支出7902万1857円、次期繰越2444万2927円となる旨

報告され、平成18年度中の支出予定(百年史発行繰越事業案等)についても説明があり、検討の結果、承認された。

(承認)

3 監査結果について

4月7日に実施された一力・山本両監事による監査結果について、山本監事より概ね妥当であることが報告がされた。

(承認)

4 定款の一部変更(案)について

3月31日、文部科学省へ平成18年度事業計画・収支予算を届け出たおり、事業計画等についても総会の承認が必要であると指摘をされ、不受理となった。また、平成16年12月14日に実施された文部科学省の实地検査においても理事会の開催回数等について指摘を受けていたため、3月理事会において承認された定款第13条の変更(理事定数の減員)に加え、役員等の選出方法、理事会の開催回数等に関する第14条、第15条、第27条、第42条、第43条および第50条の一部を変更することとした。文部科学省の事前手続(内諾)に時間がかかるため、通常総会に間に合うよう努力している。

5 監事(補欠1名)選任の件

一力監事の辞任に伴い、新監事

(承認)

として財務委員の竹中彰氏(会員番号12981)を評議員会に推薦することとした。

(承認)

6 旅費規程改正(案)について

税務当局より、指摘があったため、各種行事における交通費支出の規定をより明確化・厳格化することとした。特に会費を徴収して行事を実行する場合、行事担当者の交通費は当該行事による会費内で処理することとし、例外として会より補助する場合は会費を含む収支報告書の提出を義務付けることとする。

(承認)

7 「山岳」記事転載許可願：同志社大学山岳会

同志社大学山岳会80年誌制作のため、第31年第1号ほかの転載許可願。

(承認)

8 「山岳」および写真等転載許可願：(株)山と溪谷社

「山と溪谷」5月号における特集記事「横有恒とマナスル」への写真、資料の転載許可願。申請が選すぎるため、今後十分に留意するよう注意する。

(承認・有料)

9 「東京都山岳連盟」の社団法人化への対応について

「東京都山岳連盟」が社団法人化されることとなり、5月下旬設立

総会が予定されている。傘下の本会に正会員として登録するよう連絡がきているが、全国組織である本会と都岳連の会員の範囲が合致しないとの意見があるため、評議員の意見を聞いた上で、「東京都岳連」の上部団体である「日本山岳協会」の意見も伺い、慎重に対応することとした。(承認)

【報告事項】

- 1 3月25日 評議員会
平成18年度事業計画(案)・収支予算(案)および名誉会員推薦等に関する内規改定について検討した。
- 2 3月28日 委員長会議
平成18年度委員会予算(案)、源泉徴収および交通費支出についての話し合いを行なった。
- 3 3月31日 文部科学省へ平成18年度事業計画(案)および収支予算(案)の届出を行なったが不受理となった。
- 4 4月7日 一力・山本両監事による監査が行なわれた。
- 5 3月度入会者は0名である。

ルーム日誌 4月

- 3日 総務委員会
- 4日 図書委員会 アルパインズ

24日	22日	21日	20日	19日	18日	17日	15日	14日	13日	12日	11日	10日	7日	6日	5日	
倶楽部	高尾の森実行委員会	山想	山遊会	つくも会	山研運営委員会	フォトビデオクラブ	山想倶楽部	長期登山計画委員会	山の自然研究会	山想倶楽部	アルパインズスケッチクラブ	アルパインズスキークラブ	中央分水嶺委員会	フォトビデオクラブ	山岳地理クラブ	高尾の森実行委員会

25日	26日	27日	物故	井上博	小原和晴	退会	武田敏	藤井明	井吹光代	永井孝子	清水國道	出原朗	佐藤 税	金丸静子	本間正博	青木義隆	終身会員	大山孝一
自然保護委員会	常務理事会	自然保護委員会	上村秀雄	(5990)	(7727)	(8364)	(9190)	(9190)	(10052)	(10057)	(10773)	(11903)	(12048)	(13033)	(13577)	(13729)	(5631)	(5631)
広報委員	資料映像委員	山岳地理	2780	06・3・7	06・4・25	秋田	秋田	秋田	関西	関西	北海道	東海	秋田	宮崎	山形			

図書受入報告 (2006年4月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
岐阜県山岳遭難防止対策協議会	稜線——平成17年中の山岳遭難・山岳警備活動	20pp/30cm	岐阜県警察本部	2006	発行者寄贈
西口正司	白神物語—マタギが愛した奇跡の山々	283pp/19cm	新風舎	2006	著者寄贈
「岳人」編集部(編)	日本の登山家が愛したルート50	222pp/21cm	東京新聞出版局	2006	出版社寄贈
橋本實(編)	山桜特別号/学習院登山史(Ⅰ) 1887-1953	760pp/27cm	学習院輔仁会・山桜会	2006	発行者寄贈
手塚宗求	わが高原霧ヶ峰	293pp/22cm	山と溪谷社	2006	出版社寄贈
J.ジョーダン(著)・海津正彦(訳)	K2 非情の頂——5人の女性サミッターの生と死	462pp/22cm	山と溪谷社	2006	出版社寄贈
石川県勤労者山岳連盟(編)	—1982—ニルギリ北峰	139pp/26cm	石川県勤労者山岳連盟	1987	発行者寄贈
西嶋鍊太郎(編)	中国四川省 横断山脈大雪山系「亜拉神山」登山報告書	303pp/21cm	2005年亜拉神山登山隊	2006	発行者寄贈
Trevor Braham	When the Alps Cast Their Spell	314pp/24cm	The In Pinn	2004	購入
Jim Perrin	The Villain—A Portrait of Don Whillans	354pp/24cm	Mountaineers Books	2005	購入

Climbing & Medicine · 55

登山中の“歯磨き”はどうしたらよいか 野口いづみ

「なぜ歯磨きをするのでしょうか」と尋ねると、「虫歯にならないために」と答える方が少なくない。しかし、成人にとっては、「歯周病にならないために」という目的も負けず劣らず重要である。小児は虫歯にかかりやすく、歯を失う最大の原因は虫歯であるが、成人になると虫歯にかかりにくく、進行も遅くなる。しかし、ほとんどの成人が多かれ少なかれ歯周病にかかっており、歯を失う大きな原因になっている。なお、「歯磨き」というと、“歯だけをごしごし磨けばよい”というイメージがつきまとうので、「ブラッシング」と呼ぶ方が実態に即している。歯と歯肉の境目に斜めにブラシの毛先をあて、やさしく前後にマッサージする。そうすると、歯垢が除去され、歯肉の血流が良くなり、歯周病を改善するほか、予防効果もある。

歯周病の原因は口腔内の細菌が大きな原因である。口腔内の細菌は歯周病や虫歯の原因になるとともに、最近では、心臓病との関連を示す

研究もあり、遠隔臓器や全身的な病気と歯周病との関係を示す研究が盛んになっている。口腔内細菌が全身に及ぼす影響は想像以上に大きいのである。

ブラッシングは毎食後行なうことが理想的であるが、登山中は難しい。かといって、数日の登山中にまったく磨かなければ不都合が大きい。1日1回のブラッシングでも適切に行なえば成果が得られるので、1回は行ないたい。その場合、いつが良いかという点、夕食後の就寝前が、行動に余裕がある時間帯で、適している。それとともに、重要なことは、就寝中は唾液の分泌が減少して口腔内の自浄作用が低下し、口の中が細菌培養器状態化するが、就寝前のブラッシングによって細菌の供給源をある程度絶つことができるからである。

ブラッシングでは物理的に歯と歯肉をマッサージすることで目的が達成されるので歯磨き剤を使う必要はない。しかし、どうしてもさっぱり感が欲しいという時は、少量の歯磨き剤を使うと良い。ただし、山中では水を漱いだ水を捨てるのが難しい場合がある。そのような場合には、発泡剤が含まれていないか少ない歯磨き剤を使うと良い。発泡剤が少なければ、口の中が泡だらけにならず、最後に紙でふき取ることができるし、飲み込むこともできる。少量の歯磨き剤は飲み込んでも無害である。



カナディアン・ロッキー 版画・奥野溪石

スーパーカイルス28日間 9/25～10/22
カトマンズ～チベット～カシュガル～クンジュラプ峠～イسلامアバード
¥720,000

ワカトリョモランマベースキャンプ15日間 10/27～11/10
成都～ラサ～シガツェ～チョモランマBC～カトマンズ ¥578,000

Wec 株式会社ウェック・トレック
国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員
〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8山内ビル4階
電話 03-3437-8848 E-MAIL info@everest.co.jp

インフォメーション

◆インターネット小委員会からのお知らせをお願いします

昨年、本会は創立100周年を迎え、新しい世紀へと歩み出しました。これを機にインターネット小委員会では、会員相互の情報交換を図るためインターネットを利用した「メールマガジン」による情報案内を、会員用ホームページの拡大サービスとして、会員用ホームページへのアクセスパスワードの申請を戴いた方を対象に試験的に配信を始めました。(無料) つきましては

- 1 メールマガジン配信希望(会員に限る)、または配信停止の希望。
- 2 登山道閉鎖や温泉オープンなど、山と関わるニュース。
- 3 スタッフ応募(JACホームページでアップロードなどを手伝っていただけの方)
- 4 その他、ご意見、ご希望を

☒jac-nlmag@jac.or.jp また

はインターネット小委員会宛に郵送でお寄せ下さい。
インターネット小委員会委員長 多田真弘

◆探登山行「富士山の植生を探る」 科学委員会

富士山の成立と植生等の探査。

日程 7月15日(土)～16日(日)

雨天決行

集合 15日 7時20分(新宿西口スバルビル前)

行程 新宿からバス利用

費用 1万5000円(往復のバス・宿泊代含む。当日徴収)

定員 30名(先着順)

申込 6月15日までに末廣垣宛

☎03-3428-6800

☎156-0052 世田谷区経

堂1-14-5

☒suehiro5@amber.plala.or.jp

◆飯豊連峰縦走 事業委員会

飯豊本山から杖差岳までの縦走。山中3泊、自炊小屋利用。寝袋、食糧、炊事用具必携。十分な体力が必要。2、3人のグループ参加が望ましい。

日時 8月2日(水)～6日(水)

集合 2日 15時 JR米沢駅

解散 6日 14時 JR小国駅

会費 3万5000円(宿泊、保険料、現地での交通費他)

定員 10名

申込 過去1年の山行歴を記入し

FAXカメールで6月20

日迄に植木淑美宛(☎195-0053

町田市能ヶ谷町1151-

54 ☎042-734-1

498)

☒yoshimi-210@smile.odn.ne.jp

◆講演会「全てはヒマラヤから始まった!?」 山の自然学クラブ

地球が生まれ、大陸が移動し、ヒマラヤが上昇し、地球の気候が変わり、植物が移動し、人が移動し、人の文化が生まれ、踊りが生まれました。さらに物質的発展を続ける人類はこれからどうなる。

日時 6月11日 12時50分受付開始、1時20分開演、16時55分終了)

場所 品川きゅりあん・小ホール

(JR大井町駅正面)

参加費 1000円(学生半額、資料代含む)

申込 (塩谷芳彦 TEL & FAX 045-

381-1329、事務局

☒zero@qb3.so-net.ne.jp)

*申込者に参加証を送ります。

◆編集後記

●山岳会の100周年記念事業だった中央分水嶺踏査の報告が、今月号をもって終わりました。隔月で連載していた各支部などの報告は、道のないルートでの藪こぎなど過酷な山行も多く、読んでいて頭が下がる思いでした。ほんとうにご苦労様でした。(神長幹雄)

今年もさげしで会いましょう

日本山岳会会報 山 732号

2006年(平成18年)5月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 平山善吉
編集人 神長幹雄
Eメール jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社